巻頭言

〈小特集〉デリダ――歴史の思考と言語の問い

Special issue:
Derrida: Thinking of History and Question of Language

この小特集に収録したのは、2019 年 3 月 16 日に立命館大学（衣笠キャンパス）にて開催された、「亀井大輔『デリダ　歴史の思考』合評会」での発表にもとづく論考である。

『デリダ　歴史の思考』は、2019 年 1 月に法政大学出版局より刊行された拙著であり、フランスの哲学者ジャック・デリダ（1930-2004 年）の思想を、主に 1960 年代の初期の時期に絞って解明せんとする研究書である。

合評会は、日本のデリダ研究者が集って設立された脱構築研究会、ならびに立命館大学・間文化現象学研究センターの主催により開催された。企画したのは同研究会を主宰する西山雄二氏（首都大学東京）であり、当日も西山氏の司会により会が進行した。まず著者の亀井が基調講演として自著紹介をした後、松田智裕氏（立命館大学）、宮﨑裕助氏（新潟大学）、郷原佳以氏（東京大学）が発表した。続いて亀井が発表者の質問やコメントに応答した後、会場全体で質疑応答や討論がおこなわれた。

以下に掲載する松田氏、宮﨑氏、郷原氏の発表は、合評本についての書評を趣旨とするものではあるが、コメント的な評をはるかに越えて、著書の主題を汲み取りつつ、それぞれの視野から、鋭い疑問を提起したり、より広い射程を提示したり、優に一編の論文以上の内実を備えた考察を展開したりしたもので、非常に充実したものであった。私自身のことは脇に置くとしても、脱構築研究会を構成する日本のデリダ研究者の熱意と力量の高さを示した会であったように思われた。これは、合評会だけに終わるのではもったいな

い。そこで今回、当日の発表（いずれも原稿を準備されていた）にもとづいた論考を集めて、小特集とすることを企画した次第である。なお最後に、著者が発表者の議論に応答する小論を付した。

なお現在（2019 年 10 月時点）、松田氏は博士論文を元にデリダの研究書を刊行準備中である。宮﨑氏もこれまでの研究をまとめたデリダについての著書を近く刊行する。郷原氏は『みすず』にデリダ論を連載中である。目下デリダ研究は、30 ～ 40 代の研究者により、その成果のラッシュを迎えつつあるようだ。

著書の刊行前から合評会を提案し、当日は見事な司会で会を進行してくださった西山雄二氏、綿密な発表を準備し、また小特集の企画に賛成してくださった発表者の松田智裕氏、宮﨑裕助氏、郷原佳以氏に、あらためて御礼を申し上げたい。

立命館大学文学部・准教授
亀井　大輔